

Q & Aで読み解く

P roject B ased L earning

私たちが注目しているプロジェクト・ベース学習 (Project-Based Learning=PBL) は、21世紀にふさわしい学びのスタイルとして、アメリカ・ミネソタ州の情熱ある教師たちによって開発されました。私たちは、年に1回の訪問による“定点観測”を通して、その現場に立ち会い、開発者たちとの交流を重ねてきました。そして、学ぶことを自らの責任として引き受けている若者たちの澆刺とした姿と、それを支える大人たちの凜とした姿の双方から、その確かさと可能性を確信しています。

わが国は、教育の進路をめぐって長い模索が続いています。教育改革について全世界に目を向けてリサーチすると、「プログラム型教育」から「プロジェクト型教育」への転換が急速に進行しています。とりわけ欧米では、「学習者中心の学び」による「プロジェクト型教育」こそが教育の未来を拓くという確かなコンセンサスが形成され、その理念に基づく教育改革が着々と進行しています。しかし、わが国には「プロジェクト型教育」の風土や経験の蓄積が乏しく、世界の潮流を適切に理解し、子どもたちの学びの環境を変革する機運がそれほどの盛り上がりを見せてはいません。このままでは、世界中が注目するPISA型学力の形成は難しく、教育の未来に明るい展望を見出すことをできないことが危惧されます。

このリーフレットは、この混迷する事態を少しでも打開し、日常の学びを有意味なものにすることを目的として編纂しました。エドビジョン型プロジェクト・ベース学習の入門編としてご活用いただき、「学びから始まる教育改革」を目指すスタート台に共に立っていただくことを念願しています。

日本PBL研究所理事長（千葉大学大学院教授） 上杉 賢士



特定非営利活動法人
日本PBL研究所

Q1：まず、エドビジョン型PBLって何？

Q1-1：プロジェクト・ベース学習(PBL)とは？

プロジェクト・ベース学習は、英文では Project-Based Learning と綴ります。そのイニシャルをとって、PBLと略称します。したがって、カタカナではプロジェクト・ベースド・ラーニングと表記するのが正確です。

私たちが、ロン・ニューエル氏の著書『PASSION for LEARNING』を翻訳する際に、日本語訳をどうすればよいかを検討して「プロジェクト・ベース学習」という表記を初めて用いました。（ロン・ニューエル著、上杉賢士・市川洋子監訳『学びの情熱を呼び覚ますプロジェクト・ベース学習』学事出版、2004）



Q1-2：プロジェクト学習とはどこが違う？

プロジェクト学習は、一般に「目的をもった追究活動」の総称と言えます。知識を系統的に順序よく学ぶ系統学習と対称的な位置にある学習方法で、源流はジョン・デューイの経験カリキュラムに求めることができます。

その流れを受け継いだキル・パトリックが、プロジェクト・メソッドを開発しました。これは、「目標・計画・実行・判断」の4段階（フェーズ）を踏むことによって、より高次の追究を可能にするという目的によって定式化された学習方法です。しかし、インターネットを象徴として開発された当時とは学習環境も大きく様変わりし、追究すべき課題や方法も多様になりました。その結果、必ずしも4段階を踏む必要はないと考えられるようになり、課題の質に応じた多様な方法が開発されました。

プロジェクト・ベース学習は、正確に翻訳すれば「プロジェクト的な発想に基づく学習」となります。したがって、プロジェクト・ベース学習もまた「目的をもった追究活動」の総称ということができます。このように、「プロジェクト学習」と「プロジェクト・ベース学習」は厳密な区別はされないまま使用しているのが現状です。

いずれにしても、欧米ではかなり一般的に用いられている学習方法です。

Q1-3：エドビジョン型PBLとは？

アメリカ・ミネソタ州で、伝統的な教育が若者の学びの環境として適していないのではないかと憂える教師たちが集まってミーティングを重ねました。そして、生徒たちの学習意欲を阻害する要因をすべて取り除いた学校モデルを創出しました。そのモデルは、ミネソタ州にあるミネソタ・ニューカントリースクール (MNCS) で結実しました。その成功に勇気と社会的評価を得た教師たちは、学校の管理・運営やカリキュラム編成までも含む支援組織としてのエドビジョン (EdVisions Cooperative=全米初の教員による協同組合) を組織しました。

エドビジョン型PBLとは、直接的にはMNCSで開発され、エドビジョンが全米に向けて発信している教育方法を指します。それは、特定の理論の実践化や実証化ではなく、現実を変革しようとする優れた教育モデルです。2008年現在で、エドビジョン型PBL校は38校に及びます。私たちはすでに、そのうちの12校を訪問しました。そのいずれもが、地域や学校の実情に応じてアレンジしながらPBLを取り入れています。また、エドビジョン系列校ではなくても、このモデルの全体もしくは一部を取り入れている学校は急激に増加しています。

Q1-4:エドビジョン型PBLの特徴は？

エドビジョンの説明によると、エドビジョン型PBLの特徴は次の4点にあります。

① 生徒中心の民主的な文化

学びの主体である子どもたちは、その設定の中で何にも優先して最も尊重されなければなりません。そのためには、現在の学びをめぐるさまざまな条件をこの一点に向けて改善することを目的として開発されました。エドビジョン型PBLは、「学習者中心の学び」を実現するための教育方法です。

② 生徒による自発的なPBL

そのための具体的な方法として、プロジェクト・ベース学習が開発されました。ここでは、生徒は自分の興味・関心や問題意識に沿ってことん追跡することが尊重されます。このことによって、学ぶことが自分の責任であり、自分の将来にとって役立つことという最も重要な動機と意欲を獲得できるのです。

③ 真正評価

一般にプロジェクト学習では、学びへの意欲に最大限に配慮します。しかし、この時期の子どもたちの学びは、同時に確かな学力や能力の獲得を保証するものでなければなりません。そこで、開発者たちは、真正評価という方法に注目しました。これは、一般に「丸ごと評価」と呼ばれ、学びによる変化や成長を多様な視点からとらえることに特徴があります。エドビジョン型PBLでは、「獲得が期待される能力基準表」と「州の履修規準（日本の学習指導要領に相当）」の二つの評価規準が提示され、在学中にこれらのすべてをクリアすることが期待されます。評価規準の事前提示によって、アドバイザーと学習者は協同してその目標に向かうことが可能になります。

④ 教師のオーナーシップ

開発者たちは、これらの条件を最大限に満たすためには「教師のオーナーシップ」が欠かせないと主張します。ここでいうオーナーシップとは、教育に関する決定権を有することを指します。理想的な学びを実現するためには、教師たちが自律的に諸条件を決定することが必要だというのです。そのために、開発者たちは1991年にミネソタ州で成立しその後全米に拡大しているチャーター法を最大限に活用しています。

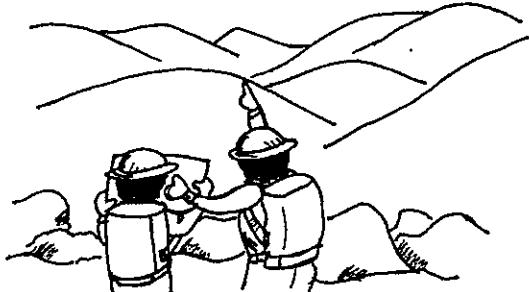
Q1-5:PBLには2種類ある？

2009年8月現在で、「PBL」と入力してインターネットで検索すると、約1000万件がヒットします。その中には、偶然にもイニシアルがPBLとなるサイトも多数ありますが、関係する情報は二つに分かれます。

一つは、Problem-Based Learningです。インターネットで検索すると、理工系や医薬系の大学や大学院などのシラバス紹介が目立ちます。これらの分野では、かつてに比べて習得すべき知識や技能が効率的に増加しました。しかし、教育に向けられる時間はそれほど増えていません。そこで、ある特定分野で必要とされる知識や技能を効率的・有意味的に獲得させるために考え出されたのが、Problem-Based Learningと見てよいでしょう。そのために、Problem-Based Learningでは、どのような課題を設定するかの管理者は課題を慎重に設定することが求められます。

もう一つが、Project-Based Learningです。前の説明と対比させて言えば、Project-Based Learningではテーマは原則として学習者が立てます。つまり、どんなテーマに取り組むかは学習者の意志に任されているのです。その点を示したのが右のイラストです。Problemでは登るべきルートが定められているのに対し、Projectではどの山に登るかの決定が学習者に任されているのです。

ただし、この両者の区別は厳密なものではなく、どちらも「問題解決学習」のための方法と見なされています。



Q2: それでは、PBLはどう進める？

Q2-1: テーマはどのようにして決める？

基本的には、自分が興味や関心があることなら何でもいいのです。「何時間取り組んでも飽きないこと」「好きで好きでたまらないこと」などについて、アドバイザーと相談してテーマを決めます。

一般的には、「〇〇について」というようなテーマ設定の仕方は、「調べ学習」に終始しがちで、その後にあまり深まりが期待できません。「〇〇（素材）+△△する（活動）」の公式に当てはめるようにすると、具体的な活動を伴うプロジェクトになります。さらに、「□□（形容詞）な〇〇（素材）」や「□□（副詞）のように△△する（活動）」というように工夫すると、テーマはよりいっそう焦点化されます。

また、取り組んだプロジェクトの成果は、評価規準に即してどの規準に適合するかを評価します。この評価規準はどこのPBL校でも独自に作成したものを用意していて、卒業時までにすべての規準をクリアすることが期待されています。したがって、まだクリアしていない規準を満たすために新たなテーマに基づくプロジェクトを始めることも必要になります。その点については、「評価システム」の項で詳しく説明します。

Q2-2: よいプロジェクトのテーマとは？

PBL校の多くは、企画書の中に「テーマの価値」を検討させる欄を用意しています。学校によって若干の違いはあるのですが、大別すると次の2点から考えさせます。

- ①このプロジェクトを進めることによって、自分にとってどんないいことがあるか。
- ②このプロジェクトを進めることによって、周りの人や社会にとってどんないいことがあるか。

集約すると、「自己成長」と「社会貢献」になります。この問い合わせによって、生徒たちは自分の興味や関心に基づくテーマが、自分の成長や周囲への貢献ができるように方向を定めていきます。特に、「自分の学んだことが社会の役に立つ」という視点は、わが国の教育では見落とされがちながらに示唆に富むものといえましょう。

Q2-3: 情報収集はどのようにする？

プロジェクトの追究のプロセスでは、大量の情報を集める必要があります。現代では、インターネットがそのための重要なツールとなります。しかし、PBL校では、たとえば「少なくとも3種類の情報を使い、その中の一つは「実在の人物であること」というような指示をします。この措置によって、学習者は地域の専門家や地域の人々と直接対面して情報を集めることになります。それを通して、コミュニケーション能力を獲得し、オリジナルな情報を加えることができるようになります。わが国の卒業論文や修士論文などでも、しばしば質問紙やインタビューを通して調査を行います。これも、「実在の人物」から「オリジナル」の情報を収集する方法と言ることができます。

Q2-4: プrezentationの方法は？

プロジェクトの成果は、聴衆を前にしてプレゼンテーションします。PBL校の多くは、このプレゼンを夜の時間帯に行います（Presentation Night）。これによって、地域の方々や保護者が立ち会うことが可能になり、学校の説明責任の果たし方の一環ともなります。プレゼンは、パワーポイントを使う場合が多いのですが、それ以外にエキジビション（作品展示）やパフォーマンス（演示）など、プロジェクトの内容に応じて多様な方法が考えられます。

Q2-5: プロジェクトの評価はどうする？

エドビジョン型プロジェクト・ベース学習が他と際だって違う点は、この評価のシステムにあります。その点を理解していただくために、ここでは3つに分けて説明します。

① 評価規準の事前提示

PBL校では、入学と同時に二つの評価規準表が生徒に手渡されます。一つは、「州の履修規準」で、日本でいう学習指導要領に相当します。もう一つは、「自律学習者のためのプロジェクトスキル」です。これらは、いずれもその学校を卒業するまでにクリアすることが期待されます。そして、どのプロジェクトでどの規準がクリアできるかに見通しをつけながら、生徒はプロジェクトをセルフコントロールします。評価規準があらかじめ提示されることによって、学びは自律的で目的的になります。また、エドビジョン型PBLが「学力保障」も同時に成し遂げるという特徴が、この点に集約的に示されています。

② 評価規準への適合

生徒たちは、プロジェクトの企画を立てる段階で、このプロジェクトによってどの規準がクリアできるかの見通しを立てます。また、追究のプロセスでは連続的に自己評価を行います。そして、プロジェクトが終結した段階でどの規準をどの程度クリアしたかを自己申告します。そして、次に紹介する評議会議で判定されますが、生徒にとって最も難しいのが、この評価規準への適合だと言われています。その点をフォローするために、学習指導要領が示す必要事項を端から順に系統立てて教えていくか、この難しい作業を乗り越えて自律学習者への成長を期待するか。その点に対する判断が、私たちに求められているのです。

③ 評議会議

プロジェクトが終結すると、生徒は自分のために評議会議を開くように求めます。評議会議は、生徒本人とそのアドバイザー、他のグループのアドバイザーや専門家などによって構成されます。そして、評価規準への適合の度合いを生徒が自己申告し、それをもとに話し合いが行われます。評議会議に立ち会いましたが、厳しい雰囲気の中でも学習者とアドバイザーの絆が深まっていく様子がよく分かりました。評議は学習者に「断罪を求めるもの」ではなく、「成長を促すもの」なのです。



MNCSの評議会議

Q2-6: 企画書の様式は？

企画書の様式は、特に統一したものはありません。ミネソタ・ニューカントリースクールでも、訪問するたびに様式に改良が加えられていますし、また学校ごとに独自の様式を作成している場合が多いのです。私たちは、日本のさまざまな対象に向けて現在ではすでに第10版まで作成しました。

基本的には、この項で述べた要件を含んだものであればよいのですが、以下に標準的な事項を紹介します。

- ① 名前（グループプロジェクトの場合はメンバーの名前も）
- ② テーマ
- ③ テーマのアウトライン（ウェビングやマッピングによる）
- ④ プロジェクトのゴール（どういう状態になれば完成といえるか）
- ⑤ プロジェクトの価値
(自分にとって、周囲や社会にとってどんないいことがあるか)
- ⑥ プロジェクトの計画（活動の順序と時間的見通し）
- ⑦ 情報源に関する見通し
(少なくとも三つの情報源、うち一つは実在の人物から)
- ⑧ プロジェクトの成果の見通し（どの規準をクリアできるか）
- ⑨ アドバイザー・保護者のコメントとサイン



エドビジョン型PBLを生んだMNCS

Q3: ところで、チャータースクールって何？

Q3-1: チャータースクールとは何？

チャーター法とは、**契約条件（チャーター）を満たすこと**と引き替えに、国の定めや自治体の諸規定に拘束されることなく**自由な教育ができる制度**のことです。集まった生徒の人数に応じて公的資金が配分されるので、制度上は公立学校として扱われます。1991年にミネソタ州で初めてチャーター法が成立し、現在では40州で制定されています。この法律に支えられて、全米で約4000校を超えるチャータースクールが設立されています。この数値は人口約6万人に1校の割合ですから、わが国に置き換えるとチャータースクールの数的規模が実感できます。

Q3-2: チャータースクールはどこでもPBLをしている？

2001年から始めた定点観測で、私たちはすでに約40校（延べ70校）のチャータースクールを訪問しました。その経験から言えば、どこでも独自の教育を展開していて、**チャータースクールの数だけ教育の仕方がある**と言っても過言ではありません。もちろん、チャータースクールのすべてがPBLを採用しているわけではありません。

ミネソタ・ニューカントリースクール（MNCS）をはじめとするPBL校の多くは、PBLを大幅に取り入れています。このような措置はチャーター法の適用を受けなければ難しいため、PBL校の多くがチャータースクールです。しかし、部分的に取り入れることも可能ですので、一般の公立校で何らかの形でPBLを導入している学校は相当数にのぼります。エドビジョンでは毎年夏にPBLのセミナーを開催し、全米から多くの教師たちが集まります。

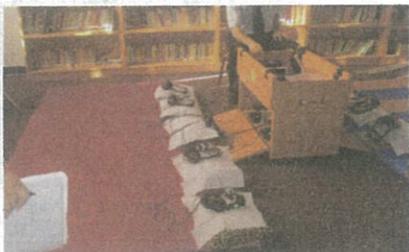
Q3-3: PBL以外にどんな特色のある教育をしている？

学校ごとに特色があり、教育上の共通性はありません。以下に、私たちが訪問した中から3校を紹介します。

ニューヨークのウエストハーレムにある**キップ・スター・チャータースクール**（KIPP S.T.A.R. College Prep Charter School）は、生活水準の低い地域の子どもたちを対象にして、基礎学力の補充やしつけに重点を置いた教育をしています。生徒たちは、「Work Hard, Be Nice」とプリントされた揃いのTシャツを誇らしげに着ていました。貧困層への一定水準の教育保障は、チャータースクールの果たすべき重要な役割と見なされています。

ミネアポリスにある**ニュー・ビジョン・スクール**（New Visions School）は、ADDやADHDなどの発達障害のある子どもたちを受け入れ、治療的訓練をカリキュラムに取り入れています。この学校では、薬の投与をしない治療方法を取り入れています。通学する生徒の40%が特別な教育が必要であり、70%が貧困層であるといいます。このように、特別なニーズに応えることもまた、チャータースクールの重要な役割です。

ラスベガスにある**オデッセイ・チャータースクール**（Odyssey Charter School）は、オンライン教育システムを導入して、幼稚園児から高校生まで約1400名を受け入れています。オンライン教育は、何らかの事情で通学できない子どものために開発されました。しかし、本校では、たとえばプロテニスプレーヤーを目指す若者が、テニススクールに通いながら学校を利用するというように、オンライン教育の活用法が拡大しています。



Q4:PBLでは、教師の役割はどう変わる？

Q4-1:プロジェクトが進んでいる間、教師は何をすればよい？

PBLでは、子どもが自発的に学習を進めるので、教師は基本的に支援者としての役割を務めます。関わり方の原則は、学習者の力量に応じて臨機応変に対応することです。仮に学習者が取り組む課題が見つからない場合はその発見のための援助をします。追究の方法が分からなければ、いっしょに追究することが必要です。しかし、学習者の力量が高く、テーマ設定から追究・集約・プレゼンまでを自力で進めることができれば、教師はただ見守るだけでいいのです。この「ただ見守るだけ」というのは、献身的な教師にとっては何とも落ち着かないポジションです。でも、学習者が自力で進めることができるのであれば、それが理想的な役割と言えるのです。

Q4-2:アドバイザーと呼ぶのはなぜ？

PBL校では、生徒のプロジェクトを支援する教師をアドバイザーと呼びます。アドバイザーは、「傍らに寄り添う存在」であり、学習への「同行者」と定義することができます。これに対して、伝統的な教育では教師が子どもと向かい合って語ることが多く、対比的に「対面者」と言ってよいでしょう。同行者としての教師は、評価規準を事前に示して、共に学ぶ仲間として学習者の傍らに寄り添います。そして、学習者が評価規準をクリアするために献身的な支援をします。この関わりが、学習者とアドバイザーの絆をいっそう強いものにするのです。

Q4-3:なぜ、アドバイザーの役割が重要？

わが国では、教師が子どもたちの前に立って語ることを、教室の普通の風景として多くの人々が信じています。子どもたちによい教育を行うことは、優れた教師が習得すべき内容を適切に伝達することと同義にとらえられています。私たちは、この伝統的で広範な支持を得ているビリーフを、一度疑ってみようと考えています。

伝統的な教育の場面で子どもたちに必要とされるのは、教師が話すことを漏らさずに理解することです。わが国の教育においては、それはそれで重要であることは疑いようありません。しかし、教師は学習指導要領を背中に負い、それに準拠して編集された教科書を手にして語ります。その内容の理解の程度は、テストで試されます。テストの問題は、原則として非公開です。ですから、子どもたちは教師の一挙手一投足に注目し、ひたすら聞くことに専念します。この環境において、子どもたちに自発的な学びへの意欲が発生するとはとうてい考えられません。

◆伝統的な教師は・・・

- ・自分が学習の課題やめあてを示し、学習者にそれに従って学ぶことを求めます。
- ・自分の指示に従わない時は、もしかしたら不利益なことが起きるかもしれないことを暗示します。
- ・自分の説明や伝達は正しく効率的で、学習者の理解の程度は学習者によって決まる無意識に考えています。
- ・自分の責任は、担当する教育（時間や対象）の範囲内だと考えます。

◆これに対して、アドバイザーは・・・

- ・学習者が何に関心をもっているかに配慮し、それを学びにつなげます。
- ・学習者の意志を最大限に尊重し、それを活かすような方向づけを心がけます。
- ・学習者の追究に寄り添い、学習の同行者としての責任を果たします。
- ・学習者の将来を見通し、それぞれの人生において成功できるように導きます。

PBLの開発者の一人、ロン・ニューエル氏は、アドバイザーの必要な資質を次の5つにまとめています。

Caring（愛情）、Competence（能力）、Confidence（自信）、Centerdness（精神的な安定感）、Creating（創造）

Q5:さて、日本ではどんな実践が？

Q5-1:日本で実践している学校は？

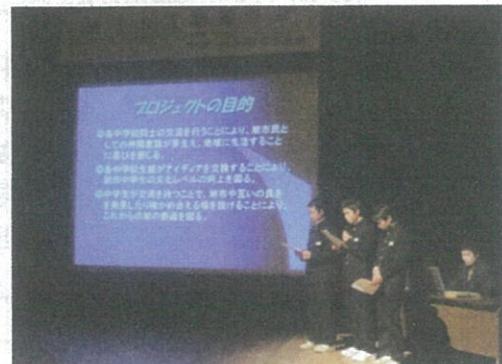
東京にある**京北学園白山高校**では、2002年からすべての1年生が取り組んでいます。「クサガメを100匹に増やす方法」「議員年金について」「ブレイクダンスの歴史と実際」など、大変ユニークなプロジェクトが生まれ、高校生の適性の発見や進路の決定に効果を發揮しています。学校を挙げて積極的に取り組みPRした結果、このPBLに魅力を感じて入学してくる生徒が増えています。例年3月に、公開のプレゼンテーションがあります。

千葉県旭市では、市内の小・中・高校生のプロジェクトに資金的な援助をする「旭3S (Asahi Support System for Students)」が発足しています。応募されたプロジェクトに対して「自己成長」や「社会貢献」などの評価基準に照らして審査し、ふさわしいと思われるプロジェクトには助成金を提供します。2007年から発足したこのシステムによって、すでに8件のプロジェクトが助成金に助けられて展開されました。助成を受けたプロジェクトの成果は、3月に行われる報告会で市民の前で報告されます。

これ以外にも、PBLによる学校改革を目指す大きな取り組みや、総合的な学習の時間に活用している例などが多数あります。今後、研究所としてはこれらの学校と連携を深めていきます。



京北学園白山高校の学校案内



旭3Sの報告会

Q5-2:実践例が紹介されている文献は？

『プロジェクト・ベース学習で育つ子どもたち』(上杉賢士・市川洋子著、学事出版、2005)には、日米18人の学びの履歴が紹介されています。その中に、日本の高校と中学校におけるPBLの実践が報告されています。また、高校でプロジェクト的な学びを経験した若者たちの座談会も収録されています。前に紹介した『学びの情熱を呼び覚ますプロジェクト・ベース学習』に続く、PBL本の第2弾という位置づけにあります。

また、それ以前に発行された『総合学習進化論～12年間で育てる学力～』(上杉賢士著、明治図書、2004)にも、PBLのスピリットに基づく多様な実践が紹介されています。



Q5-3:日本での実践例を紹介してください

私たちは、これまでさまざまな対象にPBLを適用してきました。義務教育段階にある小・中学生や高校生はもちろんのこと、大学や大学院の授業、現職教員の研修、石油コンビナートの社員研修など、対象層はきわめて広範に渡ります。そのいずれにおいても、学習者の意欲を喚起し、達成感を得ることに貢献してきました。以下に、これまでに関わった実践例の中から、“きわめつけの実践例”をピックアップして紹介します。

クサガメを100匹に増やす方法（初めての高校での実践）



「僕が今、大学に進学し、環境問題に関心をもつていろいろなことにチャレンジしているのは、ここでプロジェクト・ベース学習に出会ったおかげなんだよ」。現在、大学4年生になるT君は、後輩たちに向かってそう語りかけました。

京北学園白山高校で行われた、PBLのオリエンテーションの会場でのことです。ここにくるたびに、T君たち「PBL一期生」を対象にして、最初にチャレンジしたときのことを思い出します。今からもう7年も前のことになる2002年のことでした。それでは、「出前授業」として大学の教員が高校生たちと向かい合っていました。

その後を受けて、当時の高校1年生90名を対象にして初めてPBLをしかけました。

T君は、仲間がすでにPBLに取り組んでいる途中から転校してきました。担当の先生のアドバイスを得て、窮屈の一策として趣味であるクサガメに注目し「クサガメを100匹に増やす方法」に取り組みました。このプロジェクトは趣味から出発したものですが、環境問題を考えるには格好のテーマでした。T君は、そのプロジェクトの成果を中心にして論文募集に応募し、ドイツ視察のメンバーにも選ばれました。大学進学後も環境問題への関心はいっそう高くなり、いろいろな活動に取り組んでいます。おそらく、彼は今後、環境関係の職業に就くでしょう。PBLがキャリア教育としての機能を有することの象徴的な事例と言えます。

T君以外にもさまざまなプロジェクトを産み出し、現在では同校のきわめて特徴的な教育のひとつに数えられるようになりました。そして、この特徴にあこがれて入学希望者が急増しているとのことです。

中学生による政策提言（市ぐるみの全中学校での実践）

平成17年6月、千葉県旭市は1市3町が合併して新・旭市になりました。市は、合併後直ちに「総合計画策定市民会議」を立ち上げ、町の将来ビジョンの作成に着手しました。

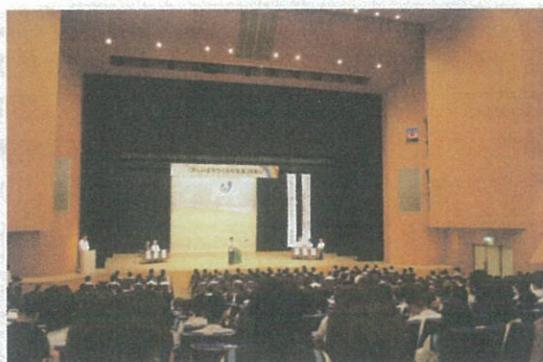
その一環として、中学生からの提言をいただきたいという要請が市からあり、教育委員会経由で私たちがサポートを依頼されました。そのためのオリエンテーションが東総文化会館で行われ、市内全中学校の1年生（当時）670名が一堂に介しました。そして、市長さんの依頼に続いて、私たちがPBLのオリエンテーションを行いました。

それから約半年が経過した平成18年7月、同じ会場で市長さんや市会議員、総合計画策定市民会議のメンバーなど約750名を前にして、2年生になった中学生たちは追究の成果を発表しました。選抜された11チーム（個人）のプレゼンは、どれもたしかなデータに基づく「政策提言」で、居合わせた大人たちは感嘆しきりでした。



こうして作成された「旭市総合計画」には、中学生たちの提言が随所に盛り込まれていました。大人たちが町の将来の担い手である中学生への認識を新たにするとともに、中学生たちは自分への自信と大人への信頼を深める絶好の企画となりました。

なお、旭市ではこの政策提言を契機にして、市民の有志によって継続的に子どもたちの学びを資金面から支援する「旭・学び助成金（旭3S）」のシステムが立ち上りました。また、他の市町村でも、旭市の事例を参考にして、同様な「政策提言」に取り組むところも出てきました。



千潟産落花生を復活させよう（小学生のプロジェクト）

旭市では、小学生たちもPBLに取り組んでいます。千潟小学校の5年生は、いろいろ調べていくうちに、自分たちの千潟地区が千葉県における落花生の商業生産の発祥の地であることが分かりました。しかし、「落花生といえば八街」というように、今では他の地或の生産が盛んに千潟地区ではほとんど栽培していません。そこで子どもたちは、「千潟産落花生を復活させよう」というプロジェクトを立ち上げ、さまざまな追究をしました。彼らのゴールは、「このプロジェクトに賛成してくれる人が200人を超えたたら完成」というものでした。保護者や地域の方々に熱心に説いて回った甲斐があって、賛同者は300人にも及びました。しかし、と、彼らは悩みました。「賛同者が目標に達したから完成」「でも、千潟産落花生が復活したわけではないから未完成」。いつまでも議論は続きます。でも、このプロジェクトを通して彼らはいろいろなことを学んだはずです。PBLは、追究のプロセスにおける豊かな学びを特徴とするのです。



学校における個人情報保護のためのガイドライン作成（大学院授業に適用）

UBSメモリーの開発やネットワークの進展に伴って、情報交流はしごく便利になりました。しかし、それは同時に大量の情報が一気に漏洩する危険性も増大します。学校は、いわば“個人情報の宝庫”です。子どもに関する情報をできるだけ多く収集することによって、教育の質もまた上がると信じられてきました。したがって、個人情報保護という社会的な要請と、充実した教育活動の展開という両者の折り合いをどうつけるかがシビアに問われているのです。

この難題に、大学院の授業で挑戦しました。参加した学生は7名、これに教員（上杉）が加わって、8名のチームで取り組みました。約半年間をかけて、その成果をリーフレットにまとめました。このリーフレットは県内の各教育委員会にモデルとして提供しました。学生の心遣りを紹介します。

—— 最初に、何の予備知識もない学生（アドバイザーは）個人情報保護と学校について大まかな説明をし、ガイドラインを作成するというプロジェクトの目的を提示した。それによって、学生はやることがきちんと見て、熱心に参加できた。また、学生の話し合いで何回も脱線しそうなときがあったが、そのたびにアドバイスをしてくれて本線に戻してくれたのでスムーズに進めることができた。達成感はとてもある。ガイドラインを作成するというひとつ目の目標に向かって、みんなで力を合わせてできたと思う ——



石油コンビナートのリーダー養成（社員研修への適用）

団塊世代の大量退職の時代を迎え、各企業とも人材育成に力を入れています。この情勢下において、千葉県産業振興センターは京葉臨海コンビナートの社員研修に着手しました。

オール千葉県体制で取り組むこの事業の一部を受託し、社員歴10年前後のチームリーダー層を対象としてPBLをしかけました。「リーダーとしての悩み」に焦点を当て、その解決策をPBLの手法を用いて具体的に追究しようとするものでした。好評を得て、有料にもかかわらず、毎年、定員を超える申し込みがあります。



アイスセレクション2008（教員研修への適用）



アイスクリームが好きな教員が4人集まって、「安心してアイスクリームを食べるためのガイドライン作成」プロジェクトに取り組みました。テーマは何でもよいという設定だったのですが、発端は中の一人が「アイスクリームが好き」と言い出したことがあります。

いろいろ調べていくうちに、アイスクリームには5種類あること、さまざまな添加物が使われていることなどが分かりました。メンバーの視線は、「安心して・・・」という要請から自ずと添加物に向きました。一口に添加物といっても、種類はさまざまです。そして、これらは保存期間の延長やおい

しさアップなど、やはりさまざまな理由によって使われていることが判明しました。

メンバーが注目したのは、安定剤として使われている増粘多糖類でした。この中には、かなり有害なものも含まれています。そして、食品衛生法によって使用している増粘多糖類を表示することが義務づけられています。しかし、さらに詳しく調べると、表示しさえすればその種類や分量については明らかにしなくてもよいことが分かりました。「増粘多糖類使用」と表示してあってもその具体的な内容が分からぬいため、安心は保障されません。

そこで、表示されている連絡先を手がかりにして、片っ端からメーカーに電話をして確認しました。多くのメーカーは、「しばらくお時間を頂戴して、折り返しお返事します」と対応したようです。でも、中には「何でそんなことを聞くんだ」と気色ばんだメーカーもあったようです。痛いところを突かれたのでしょうか。

メンバーは、それらの結果をまとめて★の数で「おすすめ度」の一覧表を作成しました。“★3つ”に輝いたのは、調査対象となった20種類の中の5種類。逆に“★ゼロ”がら種類もありました。

これは、「教職経験10年」を過ぎた先生たちに法律で義務づけられている研修の一環です。お堅いはずの研修で好きなアイスクリームを食べられた（調べた！）ことも嬉しかったようですが、実に生き生きと取り組んでいました。教育の研修は必須の事項です。追究する楽しさを経験した教師でないと、子どもに伝えられませんから。

Q6：ちなみに、日本への導入の可能性は？

学習指導要領の改訂によって、「総合的な学習の時間」は、時間数は削減されたというものの「探究型学力」を培うという役割が明記されました。この探究型学力は、PISAにも通じるグローバルスタンダードとしてその重要性はいっそう増しています。また、そこで獲得させるべき資質・能力を各学校ごとに明示することが求めされました。さらに、「自分のこと」や「集団や社会との関わり」などについての力量形成も期待されています。

これらの諸条件を勘案すると、PBLは、狭義においては「総合的な学習の時間」に求められる条件を余すところなく満たした格好のモデルと考えることができます。年間を通して、2~3のテーマにプロジェクト・ベース学習の方法論を援用して取り組むことによって、内外の期待には十分応えることができます。

しかし、エドビジョン型PBLは、単なる「学習方法」の域を超えた「教育方法」としての意味を有しています。それは、「学習者中心」の学びを徹底して追究した結果であり、学びの本質を適切にとらえそれを支えるカリキュラムや教師のあり方などを含む教育改革に関わる総合的な提言なのです。

私たちは、このエドビジョン型PBLのスピリットを、わが国の教育の隅々にまで浸透させたいと願っています。ミネソタで出会ったPBLは、私たちに壮大なプロジェクトに着手する契機と勇気を提供してくれました。私たちのプロジェクトのゴールは、「学びから始まる教育改革」を標榜し、わが国にPBL校を設立することにあります。

Q7:最後に、日本PBL研究所とは？

Q7-1:ミッションは？

PBLの日本への紹介・普及を通して、子どもたちに学ぶ楽しさを伝え、「学びから始まる教育改革」の一翼を担うことを目指します。本研究所としてのプロジェクトのゴールは、わが国にPBL校を設立・運営することです。

Q7-2:メンバーは？

大学教員・学生、会社経営者、現場教員など、教育改革に情熱を燃やす多彩なメンバーで構成しています。また、相談役として、エドビジョン・スタッフの Doug Thomas, Ronald Newell, Dee Thomas 各氏にお願いしています。

Q7-3:設立の経緯は？

日本PBL研究所は、設立メンバーがミネソタ・ニューカントリースクールでPBLの現場に立ち会い、子どもたちの確かな育ちに衝撃を受けた経験に起源をもちます。以来、毎年1回の訪問を重ねながら、その進化のプロセスに注目してきました。日米という教育を取り巻く条件的な違いこそあれ、次世代を育てるという教育の社会的使命にはいささかの違いもありません。この優れた教育方法のスピリットをわが国に導入することにエネルギーを惜しまないメンバーによって、日本PBL研究所が設立されました。

Q7-4:活動は？

上記のミッションに基づき、以下のような活動を展開しています。

- ◆ エドビジョン型PBLを通して、学びの変革をめざす各種事業の展開
- ◆ PBLによる新しい学校モデルの創出と開校の支援事業
- ◆ PBLを中心とした国内外の情報交流・発信、広報・啓発事業
- ◆ PBLを導入する学校へのカリキュラム開発の支援・コンサルティング事業
- ◆ PBLのアドバイザー等の養成講座及び各種セミナーの開催に関する事業
- ◆ その他、PBLの普及を促進する各種事業



年3回発行のブックレット

Q7-5:海外視察に参加するには？

例年9月にPBL校の視察ツアーを実施していますが、事業計画の都合により時期を変更することもあります。視察ツアーでは、エドビジョンのサポートを得て、PBL校や各種教育関係機関の訪問や情報交流などを行います。ツアーに関する情報はHPで配信しています。

Q7-6:会員になるには？

いつでも受け付けます。年会費は、個人会員5,000円です。詳細は、HPでご確認ください。

Q7-7:アドレスは？

特定非営利活動法人 日本PBL研究所（略称:PBL JAPAN）

事務所：〒192-0072 東京都八王子市南町3-10 エイピット南町ビル (株)C&EP内

TEL/042-655-7933 FAX/042-655-7934

Q7-8:情報を入手するには？

ホームページは以下のとおりです。

<http://www.pbl-japan.com>

理事長の准公式ブログでも、ほぼ毎日関連の記事を配信しています <http://blogs.yahoo.co.jp/pblminnesota/>